

〔研究ノート〕

震災救援の最前線に立った中学生たち（その4） —— 1925年北但震災における旧制豊岡中学生たちの 救援奉仕活動の作文記録を発掘して——

編 著 者 深井 純一*
共同編集者 岸田 秀樹**

本稿は北但震災時における旧制豊岡中学校生徒による救援奉仕活動の記録作文の紹介第四集である。この連載はその救援奉仕活動の中心となった5年生60名全員の作文を順次紹介している。それは第一に阪神淡路大震災との比較研究のために、農漁村・地方都市の中小規模のコミュニティにおける地震被害、震災救援奉仕活動、復興についての情報を提供すること、第二に青年期にある生徒たちの、被災者救出をも含めた、自発的な救援奉仕活動についての研究に寄与することを目的としている。

キーワード：北但震災，救援奉仕活動，旧制豊岡中学生，作文記録，震災風景。

行動と日誌 友田 勸

一、地震が起こった時、生徒一同運動場に集まった。それより解散後、保証人の家を見舞いに行った。倒壊はしていなかった。それから駅の方面を視察に行った。中学生の多くは人夫が出した死人を小学校の仮収容所に運んで行った。

死人を運んでいる時、郵便局辺りから火が出た。それで丸地・徳田・森脇先生の後に従って火事場の方面に行った。そして平位・小田ら三人が一組になって他人の家の荷物を運んだ。

それから保証人の家の近所まで火が来たので、保証人の家の荷物を運びに行った。それから午後七時寄宿舍に帰り、夕飯を食べ、小学校前の火消しポンプの所に行き、吸い上げに働き、その後寄宿舍に帰って、午後十一時ころ寄宿舍の前の広場において雑魚寝をした。起床五時。

二、二十四日 朝に寄宿舍解散となり、各自自分の家に帰ることとなり、七時の汽車で藤尾光太郎（四年）と一緒に、姫路経由で大阪に赴いた。それから家に帰り一度状況を話した。父は豊岡に急行した。

二十九日朝、「伯父死す」との電報により、父と一緒に豊岡に急行した。それから午後五時、仮葬をした。

三十一日 親類のおばあさんが亡くなった。それから三十一日に寄宿舍に帰り、そして今日に到った。

三、地震が起こってから後、火事場に急行した時の平位栄二と小田良一などはよく働いた。しかし総じて皆必死となってよく働いた。あの時働かずに遊んでいた者は恐らくないはずだ。

* 立命館大学産業社会学部教授

** 立命館大学非常勤講師

感想と覚悟 友田 勳

二十三日午前十一時十分、突如として起こった大震災は、多くの人命と家屋などを破壊し、あるいは地震のため起こった火災により、多くの人家は焼かれ、豊岡および城崎などはほとんど全滅の有り様となった。〔地震に〕伴って下手から起こった火災は、豊岡の中枢地をなめ尽くし、天に立つその炎々たる火柱は、悪魔の舌のように見えた。

地震が突発した際、我らは授業中であった。地震の起こらないはずの但馬地方において起こったのであるから、最初はただぼうぜんとして、避難することも忘れていた。地震と気付いて外に飛び出すまでに、もう地震は止んでいた。

我々は土曜日で学校にいたので死者は少なかったが、これがもし自宅にいた時に起こったならば、多くの死者を出したに違いない。それは学生にとっては実際に幸運である。特に我ら寄宿舎生は何らの被害も被ってはいないのである。父を失った人、兄弟に死に別れた人、および家を倒壊され、あるいは焼かれた人に対して、寄宿舎生は同情の涙を注ぐ。

あの関東大震災のことを振り返ってみて、新聞や雑誌で大々的にその悲惨な光景が伝えられ、多大の同情をしていたが、今自分自身がこの震災に遭ってその苦痛をなめることになった。

豊岡・城崎などはまだ町が小さいだけに死者は少ない。豊岡などの場合には避難して田んぼ道に出れば人家なく、焼け死ぬことはない。

しかし東京・横浜などは大きいだけに死者も多い。東京はいくら逃げても四面火の海で、我らよりもより多くの苦痛をなめたと思えば、今回自分らが同情される立場でありながら、今よりもなお損害のひどかった関東の震災に対し

て、非常な同情の涙を注ぐのである。

何でも一度その苦痛に遭わなければ、真の苦しみは分らない。故に関東地方の人は他の地方以上に、我らに同情してくれている。今や我らは地震に対してあれこれ言っている場合ではない。のみとつちを持って立たなければならない。

ある人は言う。「自分が豊岡のバラック建てを過ぎ行く時、ベタベタに白粉^{おしろい}を塗った女が、バラックの中でゴロゴロしていた」と。こんなことでは果たして豊岡が元通りに、否、前より以上に発展することが出来るだろうか。

また東京などにおいては震災後一物でも持っていれば、そこらにある台を起こして、すぐ商売を始める。豊岡の人にはそんなところはない。今では店を開けているが、震災当時は店を開けている所はなかった。豊田町などはほとんど被害がないのに。それは田舎人の純な所であろう。

また皆が困っているのに、自分ばかりが利益を貪^{むさぼ}ってはならないという遠慮心かどうかは知らぬが、こんな場合である。どしどし店を出して他人の苦しみを救うべきである。

今はもうクヨクヨする時ではない。我らは和魂男子である。我ら中学生が物事の中堅となり、復興に従事すべきである。今や我らの頭上には全国民の同情が寄せられている。この同情に報いるように努力して、大豊岡市を建設すべきである。この震災において以前のガラガラした精神を捨てて、栄光の道を開いて行こう。

行動と日誌 仲井 儀作

一、十一時半ころに豊岡を出発、四時半ころ自宅着。経路は以下の通り。豊岡→陰→五庄村（森津では親類に寄る）→江野→江野坂→林→

自宅。同行者は谷垣・定尾・常岡・井垣。自宅に着いた後は家人とともに屋外に避難した。

二、二十四日 避難所の小屋掛けなどに一日を費やした。

二十五日 避難所で一日を過ごしたように記憶する。（竹野の震害を見に行ったのは、この日であろう）

二十六日 六時半に竹野を出発、汽車で豊岡に來た。十時の汽車で帰宅。午後手伝いなりしようと思う。

二十七日 避難所で一日を過ごしたように思う。

二十八・二十九日 田で農事に従事して一日を過ごした。

三十日 苗代の草取りに一日費やした。

三十一日 今日学校よりの通知があったため、家にいて始業の準備をした。

感想と覚悟 仲井 儀作

古来地震なしと認められたこの地方として、このようになるのは当然なことか否かは知らないけれども、第一に感じるのは建築に付いてである。すなわちその欠点を考えれば、

- （一）材料が細小であること、
- （二）割合に三階建ての家屋が多いこと、
- （三）米国産の木材が多いこと、
- （四）組み立てがからくり的である〔見かけの体裁だけをよくしている〕こと、などである。

故に今後においては、なるべく十分な材料をもって、なるたけ質のもろい米国材などを使用しないように、同時に柱などの継ぎ合わせを少なくするように、などと考えるのである。

第二に地域住民の震災に関する知識が大変浅薄なことである。すなわち余震を恐れて竹やぶ

などに避難しながらも、山上からの石などの落下を考えていないということ、また余震を恐れて火災が大きくなる前に火を始末することが出来ないこと、また地震後五日・六日が過ぎても湿気を帯びた小屋掛けに居住するなど、および「何時に余震が来る」などという風説を信じ、更にこの風説を好んで触れ回るなど、実にとてもないことだ。故に今後においては、地域住民に地震に関する知識を十分に与え、このような時の予備意識を知らせて、以後このような損失を招かないようにするべきである。

第三に感じるのは震災後の主に上級官吏の心理状態と言うよりも思考の仕方である。すなわち人口が多い町村の震災には特に十分注意をしても、村里の小部落に対しては特に注意を払わないというようなことである。

今度の震災において新聞紙上で見た港西、更に田結^{たいつ}などはどうか。このような村里では、甚だしく食料に苦しんだのではないだろうか。新聞の記事を割引きして聞くとしても、これは大いに考えるべきことである。

第四に記さねばならないことは、震災地救護に付いてである。すなわち震災後連日の夜警に疲労し尽くしている〔城崎・豊岡以外の〕地震地の青年や若い家主に対して、城崎・豊岡の復興のため〔活動するよう〕にと上級官吏が命令するということのようなことは、余りに周辺村落を無視している。当局においてはそれは例外であると言うかも知れないが、例外と言うには余りに多すぎる。このように多くの惨めな例外を作る当局の地方視察には、察するに余りある何物があるのではないか。故に今後においては当局は十分町村を視察するとともに、周辺村落の状態もよろしく精察し、十分な手段を施すべきである。

行動と日誌 中野 耕三

一、^{あたらし}新先生の国語の時間に地震が起きた。当日は直ちに学校から帰り、まず第一に父母兄弟の安否を尋ねた。しかし父は〔当時〕在京中で、当日午後七時半ごろ帰宅された。父は無事で一同安心した。それから直ちに避難した。当夜はるか北方の豊岡の空を仰いで、睡眠三時間余り。

二、二十四日 今日曜日だから一日家にいるはずであったが、余震が続々と来た。早速避難小屋に行き、心はビクビクしていた。午後豊岡に来て保証人の宅を訪れた。無事であったから安心した。次に学校に行き、先生の安否を尋ねた。

二十五日 今朝は学校に行った。まず点呼され、その後学校の整理をした。午後城崎を訪問するはずだったが、汽車の都合で見合わせた。それから五年級同士のみにて小学校に行き、営繕課長殿の所に行き、伝令〔＝命令の伝達役〕の役目をして、八時半ごろ帰宅した。

二十六日 登校した。校長より本日から六月一日まで休校すると告げられた。本日も小学校の本部・営繕課に行き、伝令の役目をした。昨日は僕一人だったが、本日は松本・鶴野・林田と僕と合わせて四人。夕方午後七時過ぎ帰宅した。

二十七日 登校し、一応校舎・運動場などを視察した。本日も営繕課で仕事をし、正午前、営繕課長の案内役となって、本校の被害場所を視察した。

二十八日 連日の疲労で今日は登校することが出来なかった。

二十九～三十一日 欠席した。家の家財の

後始末をし、震災見舞状の返事を出した。

感想と覚悟 中野 耕三

五月二十三日、突如として起こった大震災。いま当時を思い起こすも涙の種である。当時我々はちょうど第四時間目の国語の時間。聞いているだけでも空腹を感じるころであった。

同級の〇君が文章の解釈をしつつあった中、突然床・机が震動し、腰掛けていた我々は一五～一六センチも上にはね上げられ、次に廊下の壁は落ちる、黒板は落ちる、この中で我々は初めて地震と悟ったのである。

「おゝ地震だ！地震だ！」とだれ彼なしに叫んだ。しかし我々は今二階にいるのだ。駆け降りるのもまどろこしい。進退ここに極まったのである。中には直ちに机の下に潜り隠れる者、あるいは扉をねじ開ける者、あるいは一目散に廊下を走って降りる者。彼らの必死の覚悟。今思うも身の毛がよだつようである。

私もただ一目散に駆け降りた。降りたことは覚えているが、魂はどこへやら、それから先は何かこん棒で頭をグアーンと強くたたかれ、殴り付けられた牛のように、ぼうぜんと広場に立っていた自分を発見した。胸は高鳴り、目は閉ざされているのか開かれているのか分からない。

おのき震えている薄青白い友の顔を見て、「おゝ君もここにいたのか」と、やっと安心したものの、震えている足はなお止まない。しばらくして我に返り、辺りを見回すと、土煙がモウモウと上り、家は倒され、その中を人々はひたすら逃れている。

余震が続々と来て、^{あびきょうかん}阿鼻叫喚〔＝地獄の苦しみ能耐え切れずわめき叫ぶ〕。おゝこれぞわ

が但馬同胞の死傷死滅を来すものと、だれか予期した者があるだろうか。同時に古来からわが但馬地方には起こらないとされていた地震が彼らの夢を破って、未曾有の大震災が起ころうと想像した者があるだろうか。

我々が運動場に集まって校長の話を聞かされている時、はやモウモウと白煙は立ち上っていた。おゝ火の手はどこだ、中町・寺町だとか。慌ただしく避難する者が列を成している。

直ちに家に帰ろうとして自転車に乗ったが、夢見て駆けるようでなかなか進めない。後を振り返り見れば、豊岡全町は火の海と化していたのである。今まで高くそびえ立っていた建物はねじり倒され、街道には亀裂が生じ、見るもすさまじく、しかも悲惨であった。

我々はこの震災について考えてみるに、もう少し地震に対する経験があるならば、あのような大事にはならなかったであろうと思う。我々は地震に対する知識をもっともっと増進させねばならない。大いに増進させるべきだ。この度感じた経験によって、これをモットーとして大いに研究して行かねばならない。

行動と日誌 中野 隆三

一、〔二十三日は〕家事のため学校を休業した。地震の後、家が安全であるのを見て、直ちに豊岡に來た。第一に校長先生の家へ行き、少し荷物を運んだ。同級の者が荷物が多くて困っていたので、荷物を運んでやった。夕方になってから、わが村の消防が火消しに努めているのを見て、助力してやった。夜十一時ころやっと火が消えたので、消防の連中と一緒に帰った。

二、二十四日 保証人および知人の家に見舞いに行った。

二十五日 親類の家に見舞いに行った。家事（蚕）の手伝い。

写真１：一階がつぶれた家屋



出典：豊岡小学校『目で見える豊小百年史』

行動と日誌 西垣 辰雄

一、私らは学校の解散後、直ちに五人のグループを作って小学校に行き、そこで種々の手伝いをした。昼食は学校を解散した時に弁当を食べた。やがて郵便局と思われる辺りから上るモウモウたる煙を見て、小田井町の自分の保証人の家が気にかかり、川沿いにグループと一緒に同行こうとして、途中火災場所で保証人の家が安全であるのを知り、そこで直ちに手伝いをしたが、空腹のため帰宿。

食後直ちに友人の家に見舞いに行こうとして、駅通りに出たところ、学友宇川の家は既に全焼し、同じく学友赤江の家も既に危うしと見たのでそこで一働きし、次に西岡の家に行き、物品を皆出してしまった。

そうするうちに夜になった。我々は再び八人のグループを作り、家の焼けた学友の見舞いをし、次に夜警の目的で各町を回り、十時半過ぎにグループを解散。直ちに家々に帰り、野宿した。

二、二十四日 昨日の激しい働きにも疲れず、五時ころから起きて下宿のお手伝いやら、野宿している友人の訪問に出掛け、故郷から小生のお見舞いに来て下さった人に会って、父上の来豊を知り、喜んで帰宿して父上にお会いし、直ちに東京の兄や故郷の家にも電報を打とうとしたが〔父上は〕承知してくれず、そこで学友福富に会い、一緒に彼の故郷養父郡糸井村〔現・和田山町〕に行き、その日は彼の家に泊まった。（父上の許可はもちろん得て！）

二十五日 彼の家は何の変事もなし。昨夜来の安眠により、元気を回復した。我々は再び灰燼^{かいじん}の都・豊岡に一時ころ到着して友人に会い、ともに城崎の学友を訪問しようと決めて、三時何分か汽車に乗って城崎に行った。そこは見るも無惨で、その惨めさは豊岡に勝るとも劣らなかった。訪問を終えて城崎を一周した我々は、鳥取高等農業学校から生徒たちが、はるばるくわなどを持って駆けつけ、道路の修繕に努力するのを見ては涙を流さずにはいられなかった。八時ころの汽車で帰豊、帰宿後二十三日以来の地震話に時を過ごし、十一時ごろ就眠。

二十六日 本日の午前一時半の地震に安らかであるはずの夢も破れ、家の中に寝ていた小生は飛び出し、その後は野宿した。明るくなったころ、福富が小生の安否を心配して見舞いに来てくれた。朝食後中学校に来て、講堂で知人の岩田さんが青くなっていたので、十一時ころまでいて話をし、安心させるように努めた。午後学校の手伝い、午後六時過ぎの汽車で

豊岡を発った。

三十日まで故郷におり、午後八時過ぎ帰宿、十二時ころに就眠した。（友人と一緒に談話していて）

三十一日 朝から晩までかかって田結^{た い}、気比^{け い}を見て、そのついでに田結断層を見学した。午後十時ころ就眠した。

三、どんな美談があるか知らない。しかし我々五年級の学友が、少しも知らぬ人やあるいは友人のために、どれほど尽くしたか分からないほどだ、ということだけが私の頭に残っているのみ。

感想と覚悟 西崎 辰雄

五月二十三日、突如わが学校の平穩は破られた。我々の夢想さえしなかった大震災が、古来無震地帯と言われて来た但馬地方を襲った。

我々はその時町民がどのような〔様〕態を演じたかは知らない。しかしわが学友がどれほど慌てふためいたかは知っている。とは言っても、何しろ一瞬の間の出来事である。我々がどのようにして校門の所へ出たかは、あまりにも漠然として明らかな印象が残っていない。

後になって聞くとところによると、わが校舎の二階から地上目がけて飛び降りた者があるとか。そのくらい生に執着のある者が、そんなに生命を粗末にする。何という矛盾だろう。幸いにも重傷者はなかったということだ。我々の幸いは何に例えるものがあるろう。我々はどんな場合においても、このような軽率〔な行為〕はやめるように気を付けねばならない。

わが校における遺憾な事柄は、なおこれだけにとどまらなかったことが残念である。聞いたところによると地震の瞬間に、教師で真っ先に飛

び出した者がかなりある模様。各地に各種の美談が言い伝えられるのに、わが校においてはこのような有様であった。

火急の場合の事故において我を忘れて飛び出し、外に出てから気が付き、大きな危険を冒して生徒の安否を確かめる。誠に人間の至情である。しかも地震に慣れないわが地方の教師においては、なおのことそれが当てはまる。

しかしながらそれでは既に時遅しである。ゴウゴウと大音響を立てて幾多の生徒が下敷きとなり、懐かしい教師の顔を見ながらあの世行きとなってしまう。

幸いにして死者・負傷者ともになかったため、問題とならなかったものの、もし死者が一人でも生じたならば、それこそ一大問題であっただろう。これが我々生徒が千年の恨み言を言う理由である。

私は次に我々の仲間から視界を転じて、町一般に及んで見聞の一部を述べたい。我々は豊岡の火災を不可抗的なものであったと認めたくない。むしろ故意にあのような大損害を加えたものだと言いたい。流言飛語がその一因であり、各人が大変利己的であったこともまたその一因である。我々に言わせれば、「何故あの時郵便局からかなり離れた所の家を直ちにつぶし、火熱の移動を制止しなかったのであろう」と。

美談は新聞に報道されている。私はもう一つ恨み言を述べたい。豊岡にいた人はだれもがこの度の大震災に遭遇しているが、町の上手と下手の一部は、依然として大した損害も被っていない。そういう者が慰問品！慰問品！と言って騒いでいる。試みに彼女らの言動を見よ！

「まあ、あんたの家には土瓶どびんがよく当たりますなあ」、「まあ、この反物の柄はいいわ」とか言って大笑いしている。慰問の気持ちで〔贈ら

れた〕本当に優しい同情の結晶は、このようにして彼女らの大笑いの中に配給されてしまう。美しい同情に対して涙一滴流す者はない。

他方では「気の毒！気の毒！」と叫ぶ者が、慰問品は真っ先に貰うべしと行動するのである。何という醜態を暴露していることか！一言一言つばをかけてやりたいようなものが、実にどれほどあることか！余りにも醜態を見せつけられた私は、もうこの上言いたいとは思わない。我々は我々の後輩および自身の将来のために、ここに一言震災に対する決意を述べよう。

聞くところによると、倒壊する家ならば大概最初の二、三〔回〕の激動で倒壊するとか。階下にいる者は直ちに避難すべきであるとしても、階上にいる者はむやみに逃れようとして急ぐよりも、何か物品によって自分の体を安全にする方法を講ずるように心掛けなければならない。

なお震災に遭遇して一命を取り止めた者の決意は、真実のところ何物をも焼き尽くすようなある偉大なものが必要である。すなわち自己の身の回りの処置、引いては近隣、大きく言えば町のために努力する決意が必要である。

その決意の源泉はどこにあるか！他でもなく知識を深める平素の努力によらなければならない。一瞬の間の緊張と気の緩みとの間にはいかなる差違を生ずるか知れない。これを思えば、我々は無駄に時は過ごせない。平素大いに考えるところあるべきである。

最後に我々はこの度の震災を思えば、ただただ悪夢としか思えない。頭の奥の方でかすかに、あゝ！とため息をつく。

行動と日誌 西岡 勝

一、校長の講話終了後、帰宅。日常食料品の大

部分を家の裏に持ち出す。父は病院の方が忙しいため、自分は家にいた。午後二時から三時になるに従って、火勢が家の近くに押し寄せて来たため、家具を持ち出した。

中学生の友人たち（山田彦三・北條・松本・稲垣・河本・信部・西垣・奥村）および親族の助けによって、家具をほとんど全部持ち出した。この間の休みにおいて時折町に出て、他の家の家具の持ち出しを手伝った。その晩、中但病院西に避難、野宿した。

二、二十四日 家が大して破損していなかったから、家具を〔避難先の病院西から〕ひとまず自宅に持ち運んだ。大体これを済ませて、・・・の家具を駅の付近の避難所に持ち運んだ。

二十五～三十一日 大抵うちにいて家の整理をした。体が疲れているため、過半の時間は休養に用いた。

三、豊岡町内、そして豊岡に極く近い者は、一般に人々の手助けを十分にやってくれたと思われる。各人の名を列举すべきであるが、頭のかく乱のため覚えていない。

感想と覚悟 西岡 勝

思いがけなかった震災、思いがけなかった火災、すべてが夢のようである。まだ夢ではないかと疑われるくらいである。あの瞬間に起こった地殻の変動がこうした悲しい、そして惨めな現在をもたらしたのである。多数の人の上に物質的・精神的な大打撃が下されたのである。

あの瞬間、人間性そのものが、ありありと明らかに現われたかのように思われる。多くの先生は生徒に先んじ、屋外に脱^{だつと}兎のごとく走り出した。生徒も無言でそれに続いた。

人間の本性と言おうか本能と言おうか、純なる人間性はすべてこうなるだろう。先生が先に飛び出してハッと我に帰った時、〔善良な本性が〕表面〔に表われた〕人間に返った時、人間美が体中に沸き返ったのである。また倒れ掛かった家屋に足を向けて生徒を救ったのである。

こうした時我々は、人生の余りに浅ましいのに比べて、感激を深められるのである。わが子を慕って焼け跡に泣く母があり、他方では銭欲に〔目を奪われて〕、危険を顧ることもなく、わが家に飛び込んで生命を落とした者もある。

すべてが悲惨そのものである。こうした日が幾日続くかと思う時、淋しさと悲しさがヒタヒタと体に押し寄せて来るのを感じるのである。わずかに同胞の厚い情に感泣し、心を和らげられているのである。この間において奮い立つ者、幾人いるであろう？

顧みて我々を思う時、それは余りに悲しいものである。淋しいものである。あの数時間は変化を喜ぶ人間性の働きによって、何の考慮もなく心配して、単に機械的に動くのみであったが、次第に冷静に返ってくる我を思う時、物質的な損害としてはごくわずかに過ぎぬといえども、精神的な打撃は他人に比べて多くはあれ、決して少ないものではなからうと思うのである。

一緒に楽しく遊んで僕らの心を慰めてくれたあの友人たちはすべて去って行った。いつ帰ってきてまた楽しく遊べることやら……。何だかこの世に一人取り残されているような気がするのである。

もしあの瞬間に我々の生が既に永遠に、この世から放り捨てられていたならば、今ここにこの苦しみを見なくて済んだことだろう。楽しいだろうか？すべてが沈黙に終わってしまったことだろう。生が幸いか、まさに死が幸いか？永遠

の謎^{なぞ}として残された。

今後の決心、それは言うまでもない。日ごろ強く信ずる道—真実と信仰に生きていく道あるのみである。我々は震災に遭ったけれども、我々の信ずるところには何の変化も影響も来たさなかったのである。

行動と日誌 橋本 勇

一、突如震動が起こり、早速城崎に帰ったが、既に全町火の海となりどうすることも出来なかった。父母とともにバラックの建造に従事した。

二、二十四日 まず何よりも必要なのは、自分たちの住むべき住居だ。父母とともにバラック建造に従事した。

二十五日 昨夜造ったバラックに不完全な所があり、本日に至って完成した。

二十六日 町役場に行き、種々慰問品の運搬〔に従事した〕。

二十七日 町内を視察し、焼け跡を整理している人の手伝いをした。

二十八日 一日分の担当の三軒(一軒焼失、二軒倒壊)のうち焼失した家の整理。

二十九日 バラック建築用品が来たので運搬した。夜火事あり、消防に従事した。(ポンプ押し)

三十日 倒壊家屋の整理、慰問品などの配布。夜警を行った。

三十一日 壊れた家の整理。夜は夜警を行った。

三、城崎町における全中学生はいずれも町のため奮闘した。

四、地震が起こればまず落ち着いて(しかし今度のように急激ならば、天運を待つより仕方な

いが)むやみに逃げず、何かしっかりした物の横にいることだ。

感想と覚悟 橋本 勇

突如起こった地上の大変異、大地震、大震動。この大変異を一分でも一秒でも前に、予知し得る者のない現今の科学界の貧弱さ。

「あゝ人間てえ奴は威張っていても、あかん者だなあ」と、このような予期しない大変異のある場合ごとにつくづく嘆かわしくなる。

私は今回の大地震に被災した一人である。幸いに校舎が堅固であつたため命拾いをした。父母のように倒れた家の下にならなかったから、真の地震の恐ろしさを知らないが、まあ恐ろしいものらしい。私はあちこちに建てられているバラックを訪問して、色々なことを見聞した。そしてつくづく人間の醜さを知った。

あの大地震の起こった〔瞬間〕、人間は金銭・富など、すべて浮世の邪念を忘れ、赤子のような純な清い心になった。こうしてたとえそれが瞬間的にでも、醜い人間の心が浄化された。

けれどもその反面では、親は子を忘れ、子は親を忘れ、夫は妻を忘れ、妻は夫を忘れ、兄は弟を忘れるなど、自分一人が生きようとするために、すべてを忘れて逃げたではないか。何という醜さだ。そんなことを考える余裕がなかった、と言えばそれまでだが、しかし親が子をなくして、夫が妻をなくして何の生きる価値があるか。

こんなエピソードがある。それは城崎町のある自転車屋のことである。その家の息子がちょうど二十三日に病気で寝ていたところ、突如あの大地震が起こり、息子は家の下敷きになったが、両親は無事だったので、極力一致して息子を助け出すのに働いたそうである。

息子は半身救い出されたが、火は無惨にも既に彼らの身边に迫ってきたので、両親は涙を飲んで息子をそこに放っておいて逃げたとのことだ。聞く所によると、二人は息子の死を悼んで悲嘆に暮れているそうである。

私はその二人に叫んでやりたい。「そのくらい可愛い息子をなぜ見殺しにしたか。なぜ一緒に死ななかったのか」と。

住居を失った人間は、やがて貧弱ながら住居を建設する。各地方の人々は大いに同情して、救援品・慰問品などを絶えず送ってくる。聞くところによると、ある者たちはその品々の分配に当たって、品物の多い少ないをめぐる、幹部と殴り合いのけんかをやったそうだ。

また豊岡町で、焼けずに倒れもしなかった家々の連中が救援品をもらいに行ったとか、余すところなく醜さを発揮している。

獣欲そのものの発露だ。私は思った。「人間たちよ、もっと清くなれ」と。

（今後の覚悟）

今回のような大地震は、人力ではどうしようもないものであるから、むやみに悲観せず、これを機会に大いに発奮して、以前に勝る立派な町を建設することだ。ごぶしを握って立ち上り、この新しい大地の上に新しい第一歩を踏むべきだ。復興だ。復興だ。元気でやらなくちゃならない。はち切れそうな元気をもって。

行動と日誌 浜野 脩

一、地震が起こって、すぐ運動場に集合。校長先生のご注意の後、直ちに非常用の服装に〔着替え〕、まず御真影〔＝天皇・皇后の写真〕の安否を先生に問い、無事を聞くとすぐ保証人の家（一里以内）に行った。

家は大破していたが、ご家族は無事であると聞き、もし変わったことがあればすぐ手伝いに来ると約束し、まず学校に帰り、寄宿舎の中を巡り、次に福井・宇野両君とともに町に各先生・知人宅を訪ねようとした。

まず新先生の家に行き、次に僕は測候所員の方とこの間から知り合いになっていたからそこに行き、次に山王山を下り駅通りに行き、藤井電気商会と知り合っていたからそこに行き、家の中の物を運搬した後、あいさつしてそこを去り、福井君の知人の所に行った。

この時郵便局に火が移ったので、すぐ郵便局の物品を運び、その次にポンプの運転をした。少ししてから親類のおじさん（新栄銀行片岡）の所に行き、城崎に帰られたろうと思ったが、今出られたところだったので次に僕の部屋に戻った。

滝田（二年）の家の〔商品の〕たばこを運び、そのうちに火が来るから、横の滝田清兵衛殿の所に行き、色々の物を運搬し、次に川岸に出て片山・徳田両先生の家に行き、荷物を運んだ。それから知人と会い、話し合いつつ帰った。

城崎が全滅との知らせを聞き、親類〔の安否〕が気遣われてすぐ行こうと思ったが、もはや時間がないのでやめた。その時父が豊岡に自動車であって学校に立ち寄ったことを知り、方々で自動車や父を捜したがついに会えなかった。それから寄宿舎を警備して十二時過ぎ就寝した。

二、二十四日 朝、舎監先生のご注意の後、城崎に行って親類を訪ね、父にも会い、一度家に帰り、その夜は泊まった。

二十五日 朝、豊岡に帰り、学校用の（避難者案内図）を借り、直見屋で菓子を買って城崎に行き、見舞いとして贈り、城崎の郵便局着の小包を五年片岡君とともに各人に配った。十一時で帰り泊った。

二十六日　〔学校に〕おり、用事をした。

二十七日　朝八時に家に帰った。以後昨日まで家にいた。

三十一日　午前十二時、寄宿舎に帰った。

三、寄宿舎生の秩序ある活動ぶりに、自分も舎生ながら感心した。普段の非常用の訓練のためのものである。

感想と覚悟　　浜野　　修

この度の地震について感じたことのうち、第一には地震を予知することである。これには関東の震災以後〔大正〕十三年に、この分野の権威者大森・今村・中村らの博士が選んだマイケルソン水準機を、予知機として仙台・東京などの三箇所を設置する議案を臨時議会に提出し、今村博士の説明で一同賛成し、設置することにした。

ただしこれは大変大きなもので、東西南北に二本のパイプ——直径六インチ〔約一五cm〕、長さ五百フィート〔約一五二m〕、地下六フィート〔一m八二cm〕——を設け、また中央に大きなコンクリート〔の箱を〕作り、中にマイケルソン氏の水準機を置くのであるが、このような物を各地に設置することは到底困難である。

故に大いに研究して、能率優秀、比較的小型、経費が比較的少ない予知機を考案しなければならない。予知機さえ出来れば、たとえ一時間前であっても人命を救うことが出来る。またあのような大火災も起きない。地震計は大森博士らにより、完全な物が発明されているが、結果よりも予知の方が必要であるから、大いにこの方面に力を入れてほしいと思う。

いつか見た活動写真で、ある科学者が色々と考えて、ついに完全な電気点火装置を備えた火

山爆発の予知機を考えて、最後には自分の命を犠牲にしてまでも市民に火山爆発を告げ、多くの人民財産を救ったことが、今また僕の心にはっきりと浮かび、大いに心を励ます。

次に耐震の家屋を建てるようにしたい。関東震災以後、建築学者らにより大いに研究され、また色々の書物も発刊された。『科学知識』という雑誌に紹介されたが、実際に僕らが東京に修学旅行に行った時も、この耐震工法の家は、大した損害はなかったのを目撃した。

僕は大いに得るところがあった。これは大して経費も掛からずにやれるであろう。この度の豊岡の震災でもよく分かる。粗製のものは、全然見るに見られないほどつぶれている。

また一般に日本家屋は二階と一階の間の所が弱く、一階はつぶれ、二階は安全であった。故に日本家屋においては、二階に上の方が安全であると僕は強く感じた。また長い建物でも地震動に対して直角のものは比較的安全である。もし直角でなくとも、その中央が少し出たものを造れば安全であることを感じた。

これは西港小学校、およびわが寄宿舎（和魂寮・有為寮）においても、よく分かることである。日本家屋は一本の柱に四方から穴を開けているから、また粗製の二階建てならば〔柱を〕継いであるから、上下動には強いが水平動には極めて弱い。

また同時に地震に関する一般的知識を普及することである。この度の地震も、この地方は各大専門家からも、地震系より外れているから、地震の絶対的安全地だと言われていたから、地震に対する観念が（一般的には関東震災以来大いに普及し、書物も発刊されたが）薄い。

測候所すら〔地震対策を〕おろそかにしている。すなわち地震以後測候所に振幅と振動時間

の記録を見に行くと、哀れにも地震計の横にあったラジオのルーズカプラー〔＝自在連結装置？〕が落ちてガラスを破り、地震計の針を二本折り、時間の針のみ残していた。

これを見ても但馬地方には大した地震はないものと思って、そんな所にそんな物を置いていたのであろう。また人々に地震に関する知識さえあれば流言飛語もなく、たとえあったにせよ、これを信じないで、人心も落ち着き、消防も十分活動出来てあんな火災は起こらなかったであろう。

僕としては今回予知機、耐震家屋、一般知識〔の必要〕を強く感じた。これさえあれば地震は少しも恐れる必要はない。またあんな火事の時も、もっと爆弾型のもの〔消火器？〕を作り、火の熱を利用し、ガスで消したいものである。

この中で僕らに適しているのは、知識普及であると考え、大いに努力せねばなるまい。またバラックの夏の暑さを防ぐ簡単な方法を考えて助けてあげたい。終わりに世間の同情に対して、大いに我々は復興に従事し、ともに本校の名を世にとどろかさねばならない。

行動と日誌 濱中 秀雄

一、第四時間目に地震が起こったが、最初は地震とは思わず、ただじっとしていた。だがますます〔揺れを〕強く感じたので、まず机の下に入りかけたが、〔外の方が〕安全だと思って運動場に出た。

校長の話があってから下校し、途中無事に十二時半ころ家に帰って見ると、家は大丈夫であったが、〔家族は〕ただの一人もおらず、皆付近の畑の中に避難していた。その後夕方までそこにいた。夜になって一人家に帰り、道ばたに

出て夜警をしていた。

二、二十四日 家が安全であったので家の入口にいて、何するともなく過ごした。そして夜もろくろく寝ず、道端に出ていた。

二十五日 夜が明けると、すぐ豊岡に出て来て正午までいて、帰ってすぐ寝た。

二十六日 安心して家の上り口に寝ていたら、一時半に強震があったので飛び出した。それ以後は寝られず、道端に出て青年団員と一緒にいた。

二十七日 朝は家を片付け、午後寝た。

二十八日 朝起きると豊岡に出て来て午後帰り、帰るとすぐ小学校に遊びに行った。

二十九日 朝から晩まで寝た。

三十日 家の手伝いをして、午後は遊びに行った。

三十一日 朝は家の壁を落とし、午後家をすっかり片付けた。

感想と覚悟 濱中 秀雄

想い起こせばはや一昨年、関東大震災が起こり、また今回二十三日突然わが但馬地方に震災が起こり、その瞬間に数百の人命を奪い、多くの家屋を倒し、それに伴って火災が起こり、数時間の中に数千の家屋を失ってしまった。

この恐ろしい地震をせめて一時間、否十分前に知ることが出来たならば、この惨害は免れることが出来たであろう。しかしこれを予知することの出来ない今日の科学界は、甚だ貧弱なものであると、地震のある度につづく感じられる。

震災の瞬間には誰もが無邪気な赤ん坊のように、金銭・富など何も考えることなく清い心になり、信仰心が増してくる。私も被災者の一人

であるが、学校が安全であったので身体は安全であった。しかし地震ほど恐ろしいものはなく、今になっても自動車の音でもびっくりするほどであるが、ただ学校に来れば心強く思われ、勉強する気にもなれる。

この際落胆することなく、大いに心を引き締め、復興事業に活動し、旧豊岡よりも一層大きな豊岡を建設すべきである。

感想と覚悟 林田 三郎

突如発生した今回の大地震は、意外にも大きな被害をわが郷土に及ぼした。尊い数多くのわが同胞の生命と莫大な家財珍宝が、わずか数秒間に永遠に葬り去られたのである。我々は今更ながら大自然の暴威、自然現象の大威力に対して驚嘆しないではいけないのである。

振り返ってみれば関東地方の大惨害の涙が未だ我々の瞳を離れないのに、またまたこの大悲惨事に遭った。関東大地震以来次回の大地震は、必ず関西地方に起こるであろうとの予感にすっかり震えたことは事実である。

しかしこのように早速、しかも何らそのような歴史を持たない、むしろ近年わが地震国の唯一の非地震地帯として、地震学者たちの研究が行き届かず、まして〔世間に〕注目さえされていなかった当地方に、この大自然の大打撃が加えられるとは、だれが予測出来たであろう。だれも夢想さえしなかったことである。

あゝ我々はまたまた改めて人生の無常と人間の知恵の限界とを痛嘆しないではいられなかった。と同時に我々のハートは今や悲嘆の極限を脱して、新たに「窮鼠猫をかむ」〔＝追詰められたネズミはネコにさえ噛み付く例え〕という積極的手段に出るのを感じるのである。

だれが言ったのか、「現代は科学万能時代なり」、「科学偏重時代なり」、「既に大自然は征服されたり」と。あゝ我々はこのような言葉を耳にして痛嘆・長嘆息しないではいけない。いかにも現代は科学が大いに進歩した。自然は幾分か征服されたであろうけれども、これをもって以上の言葉を絶叫するのは誤りであろう。

見ていないのか？大自然の暴威が我々人間の眼前に横たわり、奇妙不可思議の現象が数限りなく展開して行くのを。我々が「窮鼠猫をかむ」という手段に出ようとするのも、あるいは当然なのではないか。

今回の大地震はすなわち我々の目覚めを促したものである。我々はこれによって発奮の動機を得たのである。この大震というものは、どこまでも憎むべきものであろうけれども、我々の目覚めの動機となり、またわが国の産業の中心都市から遠く離れている当地方に発生し、わが国家の被害を大いに減少させたことは、むしろわが国家のため誠にめでたいのである。

わが地方の大惨害が世間に伝わると、同胞の同情がわが地方に集中し、あるいは物資、あるいは金銭・労力の援助となり、まことに涙しないではいけない。一枝の草花、一通の手紙にすら心からの喜悦をささげることの出来る我々には、それらの同情がどのように映ったか。我々はそれを表す言葉を見出すことが出来ない。

あゝ我々はこの逆境に対処して、この大悲惨事に当たっても、わが同胞の同情・愛がどこまでも寄せられることを知っている。真実の愛は逆境の極にあっても離れないことを知って、この上もなく幸福な者であると思っている。真の愛を知ることの出来る者が、どんなに幸福であるかを体験することが出来た。〔復興に向けての〕我々の決意が無くてよいはずがあろうか。

行動と日誌 平位 栄二

一、運動場で解散後、下宿に走った。大きな損害なし。家族無事。自転車で有楽館前まで行き、火事を見て帰宅。昼食を終えて永井町・駅前に行き、弁当屋の嫁さんの死体掘り出しのために、巡査に手を貸した。

その後小学校庭に死体を運び、そこで死体と負傷者との選り分け。徳田・丸地・小松三先生の引率の下に火事場へ急いだ。郵便局の火事場の手伝い。目が回るほどに走り回った。

友田・小田・自分の三人が一組となり荷物運び、途中の道路の開通を図り、木材その他雑物を取り除いた。一軒、二軒と次々に手伝った。久保町の友田の親類を手伝う時分には、手の力が抜けてしまったので、しばらく休息した。

再び立って荷物運び。〔のどの〕渴きを覚えて京極通りまで水を求めに行った。火の手は中町・久保町を過ぎて永井町に迫った。

京極通りでも倒壊家屋の取り退きに忙しい。火の付近で働きたかったが、前の下宿〔の手伝い〕に入ったので、やむなく疲れを忘れて働いた。そこを終えて本田写真館、吉田勇吉の両家の荷物運搬。六時半ころ、大方七時ころだった

かも知れない、空腹を覚えて下宿に帰った。途中保証人を見舞った。

後は竹田からの消防隊と火事場に入ったが、別に働かなかった。

二、二十四日 三時ころ目が覚めた。一時間くらいは眠ったのかも知れない。空はまだ赤い。四時ころ焼け跡を見物。自宅からの伝言もあり、九時の列車で空きっ腹を抑えて帰郷。

以後三十一日まで自宅で暮した。

三、在学生の全部が真面目に働いていた。特別にだれをだれと指すことも出来ない。各自が協同して働いていたのには感心した。特に下級生が言うことを聞いてくれたのはありがたかった。

行動と日誌 福井 圭三

一、地震のため郵便局隣の民家から出た火事は、漸次広がってきたため、直ちに当所へ駆け付けた。付近に私と同じ町出身の竹尾の宅がある。見れば火は既に三軒ほどの近くに燃えて来た。

竹尾の叔父は税務署勤務のため、〔在宅しているのは〕叔母と下宿している官吏の二人、および四才と二才くらいの女の子で、まだ荷物も出さずにいたので、直ちに四年級の水垣に手伝ってもらって、全部を空地まで運んだ。

しばらくの後に火はついに隣まで及んできた。消防力を待つより外ないので、仕方なく外へ出て、片山先生宅の荷物運搬の手伝いをする。足にマメが出来て歩行困難となり、ひとまず寄宿舎へ帰って手当てを済ませた時、徳田大尉宅が火近くなり、荷物も危ういとの知らせによって、福富先生、四年級の山田弘とともに舟を借りてこぎ下り、ようやく危いところを荷物を対岸に運び終えた。

写真2：各地から寄せられた慰問袋



出典：『城崎町史』

そのころ大尉の家屋は地震のため倒壊。^{たちの}立野の和田書記先生宅へ徳田先生の荷物を運搬した。火はもはや宵田町の半ばを焼いた。保証人の高橋宅の荷物を郡役所へ運んだ。夜は中学校庭に避難している女の子の番を依頼されて、一睡もせず番をした。

二、二十四日 故郷へ引き揚げた。

二十六日 豊岡へ出る予定のところ、再度の強震があって〔親から〕許されず。別に記事なし。

感想と覚悟 福井 圭三

天は決して我々に幸いしないが、災いばかりももたらさない。その人の考え方によってどのようにも取り得るだろう。数奇な運命の手にもてあそばれることもあり、また樂觀そのもののような快楽を追うこともある。そして快楽を続けたいと望み、与えられる運命に反抗しようとする。もちろん人は皆そうだとも言えぬが。

。

暗雲低迷して不安の雰囲気包まれた日、突如として北但を襲った地震！それに伴った大火災！何と言う天の試練だろう。決して幸いだと言う者はなからう。

。

しかしそうだからと言って、一概に震災の損害を語りたくない。与えられた運命だと考えて、その面白くない運命の中から何かを見出し、新生命を開拓する資料としたいのだ。

大火柱が立った時、すべての人の心には何ら邪念もなかったであろう。もしどれほど悪人がいたとしても、あの地震の襲った時は人を害しようとも思っていないであろう。美しい純な心だったのだ。この心こそ望ましく、持ち続け

て欲しいものの一つである。

。

「苦しい時の神頼み」とか言うことがある。誰もがよく知っていたことだ。昨日まで恨みの敵とした者をも、頼りとなるならばがりつき、救助を求める。見苦しいことのように思われてならない。そしてそれを人情のように言う。私は不思議に思わずにはいられなかったが、こうして頼りとなる人の有り難さをしみじみと感ずることも出来たであろう。

。

「建設は難しく、破壊は容易なり」—今更知ったのでもない。だれもが知り過ぎるほどよく知っていることだが、この時なおしみじみと感ぜずにはいられない。

。

もしあの時恐怖を脱して、真っ赤な炎を見たならば、その雄々しさを感じたであろう。偉大な姿を見て感嘆の声を出したであろう。すべてを飲み尽くす姿。圧迫に反抗する力そのものだ。現代の我々が見習うべき若人の象徴である。「誰々を見殺しにした」「家を焼いた」……と涙するな。今更古いことにこだわるな。

既に十日を経ようとする今日、余りにも女々しい言葉だ。地震の被害が何だ！天変地異は常にある。むやみに嘆くのは止めよう。復興を急ぐ人に涙を見せまい。くわ持つ手が鈍るから。

天が与えた運命だ。自己の力で開拓しよう！そして新生命を見出そう。そして大きな不幸が幸福に変わる暁を待とう。ありがたい天の試練だと思って。老人も働け！若者は立て！そしてくわを持て！つるはしを！のみを！

そしてこの復興気分満ちている町に、快い響きを高く鳴らせ！そして復興の第一歩を強く踏み出せ！皆こぞって—

Students Who Participated in Relief Activities after a Disastrous Earthquake (Part4):

Discovery of a Collection of Essays on the Hokutan-Earthquake in 1925

by Students of Toyooka Middle School

FUKAI Jun'ichi *

KISHIDA Hideki **

Abstract: This paper is the fourth part of the introduction of essays on the Hokutan-Earthquake by students of Toyooka Middle School. This serial introduction will make the following two contributions comparative analysis, such as with the Hanshin-Awaji Earthquake :

provide information on earthquake damage, earthquake relief activities, and restoration of small-and medium-sized communities, for the purpose of

to the aid studies on adolescent voluntary relief activities, including rescuing people in disasters.

Keywords: Hokutan-Earthquake, Relief Activities, essays by students of Toyooka Middle School, photographs of damaged areas

* Professor of the Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University

** Part-time Lecturer in Ritsumeikan University